

宮城県特定鳥獣保護管理計画検討・評価委員会 ニホンザル部会会議録

日時 令和7年8月19日 13時30分～15時30分
場所 宮城県行政庁舎9階「第一会議室」（オンライン併用）
参加者 別紙出席者名簿のとおり
欠席者

添付資料

【議事資料】

- ・資料1 令和6年度ニホンザル管理事業実績報告書（県実施分）
- ・資料2 令和6年度ニホンザル管理事業実績報告書（市町村実施分）
- ・資料3 令和8年度ニホンザル管理事業実施計画書（案）（県分）
- ・資料4 令和7年度ニホンザル管理事業実施計画書（市町村分）

【報告事項に係る資料】

- ・資料5 令和6年度群れの評価について

【参考資料】

- ・資料6 ニホンザルに関する各種データ

1 開会：部会長が開会宣言を行った。

2 挨拶

事務局代表：本日は皆様にお忙しい中、お集まりいただきまして大変感謝申し上げます。

今年度は部会委員の改選時期に当たっており、去る8月12日に開催されました「宮城県特定鳥獣保護管理計画検討・評価委員会」において、ニホンザル部会の委員及び部会長、副部会長を指名していただきました。皆様には快く委員への就任をお引き受けいただき、重ねて感謝申し上げます。

本県では地域個体群が著しく増加し、人との軋轢を生じているニホンザル、イノシシ、ニホンジカ、そしてツキノワグマの四つの獣種に関して人との共生を目的に、第2種特定鳥獣管理計画を策定し、管理事業を実施している。

ニホンザルについては、電気柵や農作物の未収穫等を放置しない対策を周知徹底することで、一部の市町では被害が軽減しつつありますが、一方で被害が継続している地域や、新たに発生した地域もあり、課題があると考えている。

県としましても第五期宮城県ニホンザル管理計画に基づき、生息状況の調査、被害対策および個体数の管理などを行い、今後も農林業被害の軽減と適正な個体数管理が図られるように努めてまいりたいと考えている。

本日はニホンザルの管理計画に関する実施計画並びに鳥獣捕獲等事業の令和6年度評価報告案それから令和8年度の実施計画案についてご審議をいただくこととしている。限られた時間ではありますが、よろしく願いいたします。

部会長： この計画は長いことやっており、いただいた資料を見ると随分と充実した内容だと思う。これから先、より充実させていくために何をすべきか、短い時間ですが、ご意見をいただきたいと思う。よろしく願いいたします。

(事務局より定足数の報告が行われ、委員8名中6名が出席しており、宮城県特定鳥獣保護管理計画検討・評価委員会条例第4条第2項の規定により、本会議が有効に成立していることの報告が行われた。また、会議については原則公開であり、本会議についても特段の支障が無いことから公開で行うことを説明した。)

3 協議事項

ニホンザル管理事業の計画及び実績について

部会長： それではさっそく議事に入りたいと思う。最初事務局のほうから説明願う。

事務局： (資料に従い説明)

部会長： ありがとうございます。資料1の2ページで「広域連携区域」とあります。これとサルの群れのポピュレーションが全然見合っていない。これは他の動物も含めてこういう分け方をしたのだと思うがどこを指しているのか。

事務局： この県内4圏域については、いわゆる行政のブロック的な形で、県南の方の圏域は大河原地方振興事務所の管内、あとは仙台、沿岸部の仙台地方振興事務所の管内、といった形で、地域連携の会議を開催していただいているという状況。ポピュレーションに合わせているというよりは、どちらかという行政の市町村の所管の区域ベースでの会議という形で分けさせていただいている。

部会長： よく調べられているけれども、資料と計画と市町村で出てくるものがなかなか噛み合わない。つまり理解しているのか、と思うところがある。特に捕獲数など、結果がこれから出てくるが、もうここまできたら、どれをどうするかという話があっても良いのではないかと思う。そうしないと、やはりこの先あまり進めない。そこは今後、調査をしている方と、市町村側の実施する人たちと、もうちょっと具体的に話

を詰めながら、少しずつでも進めていければ、それが身についてくると思う。それから、捕獲個体のことについて言えば、資料6の捕獲された個体のデータがたくさん出てくるが、1歳の個体で12kgとか、1歳で普通500gのものなので、これはありえないな、というものがたくさん並んでいまして、恐らく捕獲したところから上がってきたのをそのまま出したのだと思う。ただ、これちゃんと見れば、例えば12kgと言われると、メスで、結構栄養状態が良いのではないかと考えられ、これだと、やはり増えても当たり前かな、という判断になる。ただ、どの程度この「何キロ」という数値が合っているのかどうか。それはひとえに、調査はよくやっているけれども、そこを行政の担当者の人ともう少し連絡を密にして、両方にうまく跳ね返った計画が立てられないか、と思った。

江成委員：個体の年齢がちゃんと査定できれば良いが、成獣になってからは、少なくとも年齢は結構ちゃんとした方法で査定しないとできないと思う。あと、幼獣についてはある程度までは歯の萌出などでいけるのだと思うけれども、その辺でできることを明確にして、そういうやり方に統一した方が良いのではないかと思う。無理に何でもかんでもしない方が良い。

あと3点ほどあるが、ひとつは、資料1の1ページ、3番の(1)「緩衝帯設置の推進」のところで東北のどの県でも緩衝帯整備をやりましょう、と。東北だけではないが、全国各地でやっていて、実際蓋を開けると、緩衝帯整備の一時的な予算はつくが、その後の仕組みづくりを支援しているわけではないので、結局そのまま放置されて、緩衝帯整備したところの方が数年後により被害がひどくなるというケースはかなり多いのが実態としてある。山形県でそれを調べたら、ほとんどそうになっていた。なので、このあたりの緩衝帯整備推進は良いが、その効果測定というか、長期的にちゃんと運用できているかどうかとか、このあたりをチェックされているかどうか、というところが気になった。このあたりは今どういう形になっているか。

事務局：緩衝帯の整備について、整備が行われた年度について補助して支援したという形にはなるが、その後の整備した後の実際の管理の状況というところまでは、調査や確認はしていない状況になっている。

江成委員：先ほど申し上げたことと一緒に実は、やったことによるデメリットというのは、一時的に草を刈ってしまうので、数年後、管理が継続されないと被害がひどくなってしまい、サルに限らずいろんな哺乳類全てが、出てくる頻度が上がるというケースがかなり多い。このあたりは今後、支援の中身を一時的な刈り払いなどの予算ではなくて、その地域にその仕組みを継続させる、継続してもらおうような仕組みづくりの支援に切り替えていかないと、なかなかこれは難しいかと思う。東

北のいろんな県でそういったことが今言われているので、ぜひこの点
はご検討いただいた方が良くと思う。

もう一つが、先ほど別の会議でも意見があったという GPS 首輪の話
で、これも過去に私がこの委員会で聞いたことがあるが、結局これを使
ってどういうデータが県の計画にフィードバックされているのかが
ちょっと見えない。分布図というところでは確かに出てくるのだと思
うが、もっと実はここから解析できることはたくさんあるはず。一
方、これ結構予算を使っていると思うが、フィードバックの部分が見
えないので、もっと有効活用する方法を考えた方が良く。だからこ
そ、先ほどリアルタイムでデータを共有してほしい、みたいな意見が
出てきたりすることと繋がるのではないかと思うが、GLT の首輪を使
っているためリアルタイムは難しいというのは確かにそうかと思う。そ
れ以外の方法でも何か明確に現場にフィードバックできる仕組みを持
っておかないと、「やりました」ぐらいの話というのはあまり意味が
ないと思う。私の誤解だったら申し訳ないが、そのあたりの仕組みに
ついて、これを使って県の計画がどのように良いものになっていく
か、というところで何かアイデアをお持ちでやられているか。

事務局：具体的には今回の管理事業の業務の報告書でもいただいているとお
り、群れの推定誘導域と群れの評価、あと群れの動きの部分について
GPS のデータを活用させていただいているというのが現状。それを踏
まえて、具体的に計画本体にどこまでフィードバックできているのか
という点については、十分に活用しきれいていないというところをご指
摘の通り、という認識している。今、調査で出しているデータ
をさらに活用して行って、それを今度、群れの管理に向けてどの
ように使っていくのか、実際に対策をしているところの部分でどの
ように活用していけるのか、という点については、データを勉強させて
いただきながら検討を進めてまいりたい。

部会長：GPS 首輪をつけた行動追跡データが報告書の中に出てきてよく見る
と、やはり被害が強い群れ、例えば冬のデータだと畑の周りにいるの
は餌がないから。夏になるとほとんどが畑の近くにある、といった情
報があります。これだけではなかなか色々と判断しにくいこともある
かもしれませんが、大体の傾向は掴めるのだと思う。そこから掘り崩
していけば、どこをどうやればここを遮断するとか、被害を軽減する
上で役に立つことがいっぱいあると思う。最初から全部やってしまう
のは難しいでしょうけれども、そういうことを参考にしながらやって
いく、つまり現場とうまくコンタクトできていけば、そういうことは
できると思う。

江成委員：もう一つが、GPS 首輪の件で、これも意見としてお伝えしておきた
いなと思うが、県の計画の政策事業の評価として、GPS 首輪を使った

モニタリングが入ると思う。モニタリングは何かを評価するためにやるもので、何の評価にこれを使っているのかということを示明的にして、その対象も明確にして、毎年決めていく。6群ずつ追加してつけるという話は先ほどありましたが、そのあたりを明確にさせていただく必要がある。つける段階のところからまず考えていただかないといけないのではない。つけた後に何かに生かせるか、というのももちろん考えていただきたいと思うが、つける前に、どの政策、どの事業の評価のためにこれはつけるべきだ、ということを決めていただいて、限られた予算の中で進められていると思うので、つける手続きをやるのが本来の筋なのではないかと思う。例えば先ほどの緩衝帯と組み合わせるような、緩衝帯事業をやったところで、じゃあその評価のためにモニタリングのために首輪をつける、とか。これは一つの例ですが、そのあたりを明確にしながらやっていかないと、なかなか何のためというところが、見えにくくなるので、ぜひこれは計画段階のところからご検討いただいた方が良くと思う。あと一点が、これは結構一番気になるところで、先ほども少し話が出ていましたが、その群れ捕獲とか全頭捕獲のことに、その対象群じゃないものを取ってしまう例があって、市町村に、一応「そういうことをしないでくださいね」みたいな話をされている、指導されているという話が出てきたが実際それどの程度聞いていただいているのかどうか、というところが気になっていて、東北の各県の県と市町村の動きを見てみると、県の方から指導されるのは大体どの県もそうなんです、大体それがうまくいなくて、市町村の方は市町村の中の事情で、対応せざるを得なくて、県の意向とは関わりなく、やはり群れ捕獲や、本来対象じゃないところでやってしまうケースもあったりするが、このあたりは今の現状としては、信頼関係を築きながら、この辺の調整ができていると考えて大丈夫かどうか、というところが気になった。

事務局：昨年ちょうど管理計画を改正するというタイミングで1市町村ずつ打ち合わせをさせていただいた際に、委員ご指摘のとおり、どうしても「今獲ってほしい」というご意見がある中で、今までは県にご相談をいただいた際にも、計画に沿った捕獲しか認めないという姿勢をずっと続けており、あまり市町村に寄り添うような形で意見交換ができていなかったというところがあった。管理計画はもちろん大事なので、その評価に従った対応をしていただくようにはしたいと思うが、61群あって、6群ずつしか今できていない状況があるというところで、やはり群れ評価が、どうしても2、3年空いてしまうと評価がかなり変わっている、というところを市町村の担当者からご指摘をいただいたためその群れ評価から大幅に逸脱しない程度で、捕獲を認めていくような形も若干取りながら、昨年度は対応していた。昨年も例えば群れ評価Dであれば捕獲ができるようになる、というような、計画の改正させていただいたところもある。あまり評価に沿わない捕獲をしないようお願いをし

つつも、市町村に寄り添った形となるように今後変更させていただければと思っている。

江成委員：市町村側のいろいろな事情があると思う。そのあたりをまず逆に整理していただいた方が、どういう問題がそこで起きているのかということ把握するためにも、それを例えばこういう県の会議の場で、「市町村に対してどういう対応が必要か」と議論をすることが深められると思う。そのあたりの実態を把握できるように、まずはその事情を組み上げるような仕組みというのを、寄り添うという意味ではその部分結構重要なのではないかと思うので、それを検討いただいた方が良いかと思う。それに関して、逆に群れ捕獲するべきなのにしてもらえない地域というのは、県内結構あるか。それともほとんどないか。

事務局：群れ評価が悪いという、WF などであるにも関わらず捕獲していないというものは、ほとんどないという認識をしており、逆に今は、ほとんどその悪い評価のものがだいたい良い方向、または中間の評価に移行してきているというところ。

江成委員：東北の他の県だと、群れ捕獲をしなければいけないはずなのにしてもらえないというケースも結構あって、トラブルがあったりするが、それはないという感じ。分かりました。

部会長：宮城県の場合には、WF の群れをかなり獲っていて、それがひいては被害が減ったという風に理解している。それはそれとして続ければ良いのではないかと思う。ただ、今言われたのは本当にどこの県でもそうで、「簡単に言うけれども、そうはいつでも難しいのだ」というのはどこでも当たり前のことだと思う。ただ、それをやはりやっつけていかないと、もっと具体的で効果的な対策になると思う。これは次の段階だと思う。もう一つそこを進めると全然違ってくると思う。

常田委員：まず、資料6の2ページ目、「捕獲頭数の推移」にここ20年ぐらいの捕獲数が個体数調整と有害捕獲別に示されているが、特定計画に基づく「個体数調整」が、令和元年以降なくなっているのは、県の基本方針としてそういう形にしたということか。

事務局：恐らく有害捕獲の交付金が国から出る、個体数調整の方だと出ないというところで、有害捕獲にどんどん切り替えていったのではないかと考えている。

常田委員：特定計画制度ができた時（1999年）から、特定計画で獲る場合には、「個体数調整」として出してくれと環境省はずっと言っていたが、現場にとっては区別がつかない。しかも、市町村に捕獲許可を下

ろしている県が特定計画自体は県が立てる、だけど実行は市町村という形になっていて、ここに物事がすっきり流れない、構造的な問題があると思う。しかも、鳥獣保護法のなかには、市町村長とか市町村という言葉が一切現れてこない。法律上に市町村の直接的な位置付けがないもとの苦情やコントロールの実務は判断も含めて市町村がやっている。これをすっきりさせるのはなかなか難しい問題だなという気がする。そういうこともあって、県の指導に対して市町村は従わない、という構造がずっと残っているのかなと思う。そういう中で、改善ができるやり方で、江成委員が言ったような形で進めていくしかないと思う。もう一つ、基本的な確認で、前も聞いたかもしれないが、群れの識別と、群れ数、それと群れの評価（A, B, C, D, E, F, WF）は、市町村がやっているか、それとも調査を委託しているか。

事務局：原則、県の委託にはなるが、一部市町村の情報を活用している。

常田委員：そうすると、多くのものは首輪の標識がついているか、かなり細かな情報収集に基づいて群れの識別などはなされているということで、それなりに信頼できる水準にある。

ちょっと話が飛ぶが、少し長期的な視点で見ると、資料6の3ページに各地域の群れ数と個体数の推移が出ているが、この20年間全体としては、ほとんどの区域で、群れ数が増えている。特に大きなポピュレーションについては群れ数が増え、個体数も2倍に近い状況になっている。県としては、長期的にこの状況をどうするのかという方向性を考えた方が良いのか。見ていると、2019年ぐらいまで、どんどん群れと個体数が増えてきて、その増加を抑えられていなかった。ただ、2019年以降は、でこぼこはあるけれども、群れ数については60群ちょっとで変動しながら、個体数も3,000頭ちょっとぐらいで、頭打ちにはなっている。頭打ちにできたというのは、部分的だけれども一つの成果であると思う。問題はこの状況のままで良いのかどうか。多分、力をあげばすぐに拡大する余地はあると思う。特にこれから対応が弱まれば生活環境被害みたいなのが随分出てくる可能性があると思う。クマに比べれば大したことないとはいえ、そういうことも踏まえて対応した方が良い。被害対策という点で言えば、被害の総額自体は金額に直した方が良いのではないか。金額だけで評価できないのは分かるが、1,000万円を超えないわけで、対策費はそれよりもはるかに多い金額なので、もう少し抜本的な対応を取るためにどうしたら良いのかということ、そろそろ検討を進めた方が良いのではないかと思う。

事務局：ありがとうございます、検討してまいります。

4 報告事項

令和6年度ニホンザル群れ評価について

部会長：事務局のほうから説明願う。

事務局：（資料に従い説明）

部会長：先ほど話が出たと思うが、これを見るとやはり特にどういうサルの群れを選んでというわけではない。長く見なかった群れにつけてやっているということ。それで、基本的に大体みんな行動圏とか個体数とかを常に分かるような形にしておこうという目的でやっていたと理解しました。ただ、江成委員も言われたように、もう少し一つ一つの群れに特徴があるので、これに関してはこういうことなのだから、という的の絞り方も分析するときにあるのではないか。それから、この評価も、私は元々やはり山の中にいる群れは全部Aで、人里に近いところがEとかFになるのかなと思っていたが、必ずしもそうではない。これでなかなか、どう判断して良いか難しい。今全体的にWFだったら獲っても良いのではないか、という方針ですが、それだけでもないですし、どの辺りで区切りを上げて何をすべきか、というのは、細かく見出すとまだ私にも何とも言って良いか分からんところがあるが、やはりちょっと色々、データはいっぱいあるので考えても良いのではないかという気はした。それで、今多分、白石とかあの辺が一番問題が深刻なところだと思うけれども、それから県の南部の方。新しく出てきたところが本当にひどくなるか多いのに対して、七ヶ宿なんて前ひどいと言っていたのが、この頃見たら大人しくなったなと思って驚いている。なかなかこの評価は難しいものだなと思った。これデータがいっぱい出てくるので、やっている方も大変だろうと思うが分析が必要。

常田委員： ちょっとその全体の話になってしまうが、やはりこれだけデータが20年ぐらい溜まっているので、これまでの管理の総括というような形で、一度専門家を含めたチームを作って、分析をきっちりとする。どこまで言えるかというようなことを整理して、ちゃんとしたレポートにした方が良いと思う（行政データも含めて）それを今やっておかないと、やってきたことの評価と解釈ができないまま先に進むことになる。もちろん、全てきっちり分かるわけでもないし、できない時もあると思うが、少なくともこういうことは言える、そしてここは分からない、というようなことをちゃん整理すべきだろう。これだけのデータを持っている県はあまりないと思う。このような整理は、サルの管理の全国的レベルでの検討にも役立つのではないかと思う。

部会長： 私もそれに賛成で私たち研究者的なことをやってきた人間からしてみると、データが財産だと言って、ある程度その都度それなりにまとめて、頭の中を整理しておかないと全部分からなくなる。そうすると、獲ってきたデータが役に立たなくなる。だから、毎年とは言わないが、色々との的を絞って、ここはどうだったんだ、というのを、その

都度まとめて「こうじゃないか」というのを残す必要があると思う。そうすれば、次のものが見えてくるということになると思うので、そこら辺は是非やったら良いと思う。

事務局： 来年計画の改正もあるため、データ集約やどういう分析をするかということも踏まえて、検討させていただければと思う。

江成委員： 群れ数が長期的に見ると増えてきて、個体数も増えてきている。このトレンドを今「良い方向に向かっている」と見ているのか、それとも「あまり良くない方向」なのか、そのビジョンが見えないまま個別的な評価を進めている、というような印象をどうしても受けてしまう。個別評価はそれはそれで良いが、マクロな視点、長期的な視点も含めて、これどうすべきなのかというところが見えないような気がしている。県の計画なので、もう少しそういうビジョンがあった方が良いのではないか。そのあたりを県としてどのように理解されているのか、今、上手くいっているという理解で良いのか、それとももっと群れ数は過去の経緯から減らした方が良く見えるのか、このあたりはどうか。これは結構根本の部分、核心的な部分な気がするが、どうなのか。先ほどのいろんな過去のデータを見て総括するというところともまた繋がってくるような気もするが、このあたりきちっと整理された方が良いのではないか。全体的に今日お話を聞いて、県としてどうされたいのかがちょっと見えなくて、どういうアドバイスができるのかちょっと分からないところもあるが、その辺も含めて何かあればお願いしたいが、いかがか。

事務局： 現状、なかなかマクロ的な視点での、県としてこの群れ数が60前後あるという状況で、3,000頭前後いるという状況についての評価というところを、長期的な視点でなかなか「良い」のか「悪い」のか、というところを申し上げられない。被害だけの部分で見れば、多少の減少傾向にはあるので、全く悪いわけではないのでしょうけれども、それを長期的に評価するための部分の整理をまず今後させていただきたいと思う。現状、その過去の20年のデータを見た上で、実際に今「良い」「悪い」というところを今申し上げられるところまで、私自身も理解度がちょっと進んでいないところがある。先ほどの評価の部分と、次期の計画の部分と、それを見たときに、各群れの対応の部分で、県としてどういう形にしていくのかも当然ながら、実際に被害対策の部分ですとか捕獲の部分、市町村に担っていただいているところもあるので、そこは今担当の方で寄り添って、実際に各市町村と調整、打ち合わせさせていただいているところで県の独りよがりの計画にはならないようにしながら、捕獲の方向性として現状の評価、今この群れ数、個体数で被害の状況と見て、全体的に県としてどう考えているのかということについては、今後整理をさせていただきたいと

考えている。

江成委員：そういう意味では、先ほどから出ているが、まさに「総括」。この20年ちょっと分のデータから総括されて、多分その中で見ていくと、例えば、今グレーゾーンの対象がWFとか、かなり危ない群れだけ獲るという考え方が、実は必ずしもそういう話にはならないかもしれない。もし仮に、群れ数はやはりある程度地域を絞ってここは減らした方が良いということを考えるならば、別にWFなどに限った話ではなく、群れの捕獲だってあり得ると思う。群れ数を減らすという方針が県の中に今後総括が出てくるのであれば、多分その辺の考え方や評価のあり方にも関わってくるような話だと思うので、そういった意味で今一度考えていただいた方が良いのではないか。今、なぜこれあえてこのテーマを押し上げたかという点、結局、人口減少が進み、市町村がなかなか疲弊する中で、放っておいても群れの加害性がどんどん悪い方向にいくわけです、悪くなったら獲る、悪くなったら獲るという常に事後対処みたいな話になってきて、「被害が出たらどうにかせんといかん」みたいな話になる。だけど、本来はその前に、ある程度処置をする、要するに「予防」がいる。その観点から、管理計画は策定されるべきだと私は理解している。県の計画は、今まだそこまで行けてないと思う。確かにこれだけ色々なデータを持っている県は少ないと思うが、だからこそさらに、もう一步進めて、そうした予防的な観点から管理も進めていく、被害出してから獲るという話ではなくて、将来的に予測しながら、事前に対処する。そのためには、繰り返しですが、先ほど申し上げたような骨組みとなる方針が必要だと思うが、これが今の方向性なのかどうか、という点。それを今一度総括して、もちろんそれはいろんな専門家も含めて検討するという点で良いと思うが、さらにこうもう一步先の計画にブラッシュアップするのが望ましいかと思う。

部会長：私もそれに賛成でだいぶ前から同じようなことは言ってきたと思うが、やはり、長年見ている人間から言えば「もうここでこれを放っておいたら、いずれ悪くなるよ」という群れはいるので、県の計画なんかだと、被害のひどいものを獲って良いけれど、他の群れは獲らずに置け、ということがよく出てくる。それは、ある意味正しいが、全てがそうじゃない。ここはひよっとしたら先はひどくなる、ということはある場合がある。そういうことは、やはり先に分かるのだったら手を打つべきだと思う。20年ぐらいこれをやってきて、ずっと見てきて思うが、被害をなくそうという方法でかなり進んできて、やり方もだいたい身についてきたのではないかと思っている。ただ、群れの数が増えて個体数も増えたということになっている。これどういう風に絡んでいるかよく見えない。本当に群れが増えたのか、あちこちで捕獲したからその一因としてポコポコ出てきてしまったのか、本当に増

えているかどうか。多分増えたとは思いますが、どこまで本当だ、どこまでそうだと行って良いか、これがよく見えない。やはりこれは、私がデータを見せられてそう思うだけであって、現場を見てる人が一番よく分かるとは思いますが。一旦総括してみて、この問題、どうなんだろう、というのを、とりあえずの結果みたいなのをまとめると、あと参考になると思う。

岡委員、どうでしょう。これ長年やはり私と同じようにやってきて、その辺のこれまでの感覚で言えば。

岡委員：話の流れを聞いていて、やはり「ここ20年のまとめを出す」というのには、私も賛成で、この時点でそれをやっていくことが今後に活かされるだろうというの、もう先生方おっしゃる通りだと思ふ。

常田委員：サルで起こったことではないが、クマで起きている現象と共通している部分があると思う。正確には分からなくても、20年ぐらいのスパンで見ると明らかに増えており、人間側が対策しているのに、それ以上に進出してきている。サルの場合、金額にした被害はそうでもないけれど、とにかく人間の生活域とどんどん重なるような状況になってきている。これまでの県や市町村の努力で、ここ数年はとりあえず戦線が膠着している状態だけれども、押し返してはいない。この膠着している状態というのは、それを抑えている力が弱くなれば、すぐにさらに進出を許すという状況にある。これは他の獣でもそうで、特にクマについては人身事故に繋がる問題なので、やはり早めに手を打たないと大きな問題になる。サルについては農業被害と、たまに変なサルが出て引っかけられたり噛まれたりするぐらいで済むが、クマはそうはいかない。たとえ人身被害がなくても、ちょっと変なクマが出没すれば、それだけで自治体、警察、県など数十人単位の間人が何日も拘束される。そういうことも踏まえて、特に大型獣の対策というのは、これから本腰を入れて、少し先を見ながら考えないと、その場その場での問題だけ見ているでは対応できなくなるのではないかと思う。

渡邊部会長：ありがとうございます。だいぶ色々な意見が出て、議論もできたのではないかと思う。承認してよろしいでしょうか。では本日の議事はすべて終了したということで終わりたいと思う。円滑な議事にご協力ありがとうございました。

事務局：ありがとうございます。三番目のその他に入りますが、委員の皆様から何かございますでしょうか。

部会長：ハナレザルの数が気になっている。金華山のデータはかなり参考だと思つて見ていたが、今年改めて見たら、金華山のハナレザルの数が少ない。17頭。オスもメスも同じ数で生き残っているという前提で計算

して、今県全体としてハナレザルを含めて3,000頭近くになっている。ただ、普通はやはりオスの方がちょっと早めに死ぬというのは、こういう動物では当たり前のような気がする。

例えば今年データで見るなら、オスとメス（大人）を比べてみると、大体2/3。大人のオスが今は1対1で計算してこの数になっている。特にサルなんて、メスも出ていかない、オスも多分、個体識別をほとんど全部しているはずのところなので。私たちはずっと長年やってきて、こういうデータは他のところにはなく、興味深く思った。

事務局：部会長ありがとうございました。以上を持ちまして、本日の宮城県特定鳥獣保護管理計画検討常科委員会ニホンザル部会の一切を終了いたします。委員の皆様におかれましては、御多忙のところどうもありがとうございました。